

【準備問題 1】解説（補足説明）（下書き用紙あり）

Q&A でご質問の多い準備問題 1 の解き方について、補足説明を加えていきます。「③総勘定元帳の記入」は最後で構いませんので、①、②、④の集計が 20 分程度でスムーズにできるよう、練習してください。（以下の解説は、①、②、④の補足説明を中心に行います）

<問題の解答手順>

まずは、問題文を読んでください。（5 分）

次に、問題を解く手順を把握します。

再振替仕訳→期中取引の集計（このために、下書き用紙を作成します）→決算整理前残高試算表の各勘定科目の金額を記入

<期首再振替仕訳>

資料 1 貸借対照表を見ると、「前払費用」「未収収益」「未払費用」（経過勘定項目）があります。これについて、前期末に計上した仕訳の逆仕訳を行い、経過勘定項目を取り消す必要があります。

「最振替仕訳」を行うことを忘れないようにしてください。

<資料 1 の（注）について>

※資料 1 の（注）を見ると、「手形割引高」「貸倒引当金」「減価償却累計額」「経過勘定の内訳」が記載されています。

1. 手形割引高 については、資料Ⅱ 4 手形の割引・決済に伴って保証債務を計上したり、取り崩したりするさいに必要な情報です。

4. 経過勘定の内訳 については、再振替仕訳をするために必要な情報です。

2. 貸倒引当金・・・BS 受取手形の金額は 31,360 と計上されていますが、この金額は、「貸倒引当金を控除したあとの正味の金額」です。

よって、期首受取手形の金額は $31,360 + 640 = 32,000$ であることがわかります。売掛金、長期貸付金、減価償却累計額の各項目についても、同じように考えてください。

<資料Ⅱ 期中取引の処理>

別途添付いたしました下書き用紙（実際には、時間短縮のためにフリーハンドで作成し、勘定科目名も適宜省略します）の要領で問題を解き進めていきます。

下書き用紙に、取引が頻繁に行われる科目について T フォームを作り、どこに何を集計するのかをあらかじめ決めておきます。

（手書きの下書き用紙）

- ・仕入、買掛金、支払手形・・・商品を仕入れたことに伴って増減する勘定
- ・売上、売掛金、受取手形・・・商品を売り上げたことに伴って増減する勘定
- ・現金預金・・・現金取引は頻繁に行われますので、下書き用紙を集計します。
- ・その他・・・下書き用紙の真ん中に一本線を引いて、左側に借方に出てきた項目、

右側に貸方に出てきた項目を集計します。

まずは、1. 現金預金の（増加高）（減少高）の各項目について、それぞれ頭の中で仕訳し、下書き用紙の現金預金勘定と、相手勘定の T フォームの借方、貸方それぞれ数字を記入します。

たとえば、①売上高 45,000 千円 でしたら、

（借）現金預金 45,000 （貸）売上 45,000 と仕訳されますので、下書き用紙の現金預金勘定の借方に 45,000、売上勘定の貸方に 45,000 とそれぞれ記入（集計）します。以下、同様に処理します。

<補足説明>

④手形割引高 15,000 千円について、補足しておきます。

本間では、手形の割引について、「割引手形」勘定を用いて処理しておらず、割り引いた時に「受取手形勘定を直接減額する」処理をしています。

ですので、仕訳は以下のようになります。

（割引時）

（借）当座預金 49,600 （貸）受取手形 50,000

手形売却損 400

手形売却損 500 保証債務 500

（決済時）資料Ⅱ 3 より

（借）保証債務 300 （貸）保証債務取崩益 300

これらの仕訳を正しく処理するために、手形割引高の期首残高、当期に割り引いた金額、当期に決済された割引手形の金額、期末に残っている割引手形の金額を把握します。（下書き用紙の右下を参照してください）

資料Ⅱ 7について、補足しておきます。

利益準備金積立の「会社法規定の金額」というのは、「①配当金の 10 分の 1 以上の金額を、②資本等の 4 分の 1 になるまで積み立てる」

というものでした。ですので、①と②の金額をそれぞれ計算してください。

①が $10,000 \div 10 = 1,000$ 、②が $160,000 \div 4 - 12,000 - 20,000 = 8,000$

となりますので、①と②のうち、小さい方の金額である 1,000 を利益準備金として積み立てます。よって仕訳は、以下のようになります。

（借）繰越利益剰余金 （貸）利益準備金 1,000

未払配当金 10,000

別途積立金 3,000

ちなみに、1 現金預金の（減少高）⑥配当金支払高 10,000 千円というのが、上記剰余金の配当・処分が決定した段階で貸方に計上された「未払配当金」の 10,000 千円を指しています。ですので、配当金の支払いがなされた時の仕訳は

（借）未払配当金 10,000 （貸）現金預金 10,000 となるのです。

【準備問題 2】補足説明（下書き用紙あり）

決算整理事項を参照し、問題を解いていきます。

損益計算書→貸借対照表の順で問題を解いていきます。

（参考までに下書き用紙をつけましたが、実際に問題を解くときにはフリーハンド、かつここまで丁寧には書きません。時間短縮のため、本試験で定規の持ち込みが禁止されているためです。）

資料Ⅲ

2「なお、保証債務は手形割引高の1%が設定されている。」

→これについては既に処理済みですので、参考資料と考えてください。

ただし、貸借対照表の注記を作成するときに、必要になります。

準備問題 1 と異なり、さほど難解な箇所はないように思います。

⑥貸借対照表と損益計算書の作成が 15～20 分程度でできるよう、練習してみてください。

<損益計算書>

・期末商品棚卸高・・・期末商品「帳簿」棚卸高のことです。

$600 \times 30 = 18,000$ となります。貸借対照表に計上される金額と異なりますので、注意してください。

・貸倒引当金繰入額・・・販売費及び一般管理費に計上されている 380 は売上債権（受取手形、売掛金）に対するもの、営業外費用に計上されている 40 は長期貸付金に対するものです。

<貸借対照表>

・準備問題 1 と同様、「手形割引高」「貸倒引当金」「減価償却累計額」の金額を注記し、貸借対照表に計上される金額は、これらを差し引いた純額になっています。

受取手形： $23,000 \times 2\% = 460$ $23,000 - 460 = 22,540$

売掛金： $88,000 \times 2\% = 1,760$ $88,000 - 1,760 = 86,240$

長期貸付金： $7,600 \times 5\% = 380$ $7,600 - 380 = 7,220$

建物：取得原価 60,000－減価償却累計額 7,800＝52,200

備品：取得原価 6,000－減価償却累計額 2,625＝3,375

手形割引高：解説にもあるとおり、保証債務残高を 1%で割戻し、推定で金額を計算するようにしてください。

繰越利益剰余金の金額は、決算整理前残高試算表の 21,000 に損益計算書の当期純利益 26,425 を加算して、47,425 と求めます。

簿記講座 Q&A 事務局